尾鷲港

三重県県土整備部港湾・海岸課

〒514-8570　津市広明町13番地
☎059-224-2691
URL：http://www.pref.mie.jp/kowan/hp/

1. 概況

熊野灘は江戸時代「海の東海道」といわれ、江戸～大阪間を上下する千石船が頻繁に航行した。尾鷲港は、熊野灘のほぼ中央に位置し、リアス式海岸による天然の良港であったので、避難港、風待ち、日和待ち港として繁栄した。尾鷲港自体も、背後に大台ヶ原を中心とする広大な美林を有し、前面にわが国有数の漁場をひかえ漁業が盛んに行われていたので、回船で材木、薪炭を江戸へ、鯨、鰹、鰯などを伊勢、江戸、大阪へ送る一方、尾鷲港周辺は農耕地が少ないため、米や日用雑貨を桑名、白子、伊勢から移入する商港でもあった。しかし回船への荷役は、はしけ船や長い渡り板を使用した自然港のままであった。

明治43年に竣工をみた天満浦船溜りは、当港初の人工港湾施設である。

その後林業及び漁業の発展に伴って港の重要性が増し、大正10年から昭和6年までの第1期工事に防波堤を完成、引き続き昭和6年より昭和11年に至る第2期工事整備を実施し、今日の基礎が完成された。

この間港勢は大いに発展し、昭和19年の東南海地震、昭和21年の南海地震と二度の災害に遭遇して殆どの港湾施設の機能を停止する時期もあったが、昭和25年までには復旧工事を完了し、更には昭和26年には第2防波堤に着工し同31年に竣工、昭和31年7月1日遠洋漁業基地に指定された。

昭和34年9月の伊勢湾台風、続く昭和35年5月のチリ地震津波によって、港湾海岸堤防はもちろん一般市民にも多大の被害をもたらしたが、昭和38年までの5カ年で復旧、嵩上げ等の工事を行い、防潮堤2,425m、防潮壁等2,985mの港をとりまく海水しゃへい壁が出来上がった。昭和37年度より第3ふ頭整備が始まった。これより先昭和36年から矢ノ浜地区に35万㎡の埋立工事を行い、これに中部電力尾鷲三田火力発電所（753kw）が建設され、昭和38年には東邦石油も進出し、中京地区へのエネルギー供給地ともなった。この結果外航船の入出港が活発となり、昭和39年2月出入国管理港に、同10月検疫港に、昭和41年4月開港の指定を受け、昭和42年6月1日に重要港湾になった。しかしながら、発電施設の老朽化や原油高の影響により、徐々に発電機能が縮小されていき、外航船の入出港が減少したため、平成29年1月不開港となり、平成30年12月19日に中部電力尾鷲三田火力発電所は廃止された。

現在、尾鷲港では、水産業が主体となっており、鰹、マグロの大型遠洋漁業船から中小型の近海沿岸漁船まで出入りして、港は活況を得ている。

また、平成16年には熊野古道が世界遺産に登録されたことで、観光客が増加しており、港において“イタダキ市”が開催され、水産物を求める観光客などが多く訪れている。

一方、尾鷲港周辺地域では東南海・南海地震など大規模地震の発生が危惧されている。

こういった情勢をふまえ、産業・物流拠点としての整備を進めながら、観光レクリエーション拠点、緑地空間の創出、地域の防災拠点となるような整備を進めるべく平成19年7月に港湾計画の改訂を行い、平成24年3月には耐震強化岸壁の整備が完成した。

今後、尾鷲港の整備にあたっては、長期的な尾鷲港の将来像を見据えたうえで、激しく変化を続ける社会経済情勢に柔軟に対応し、尾鷲市のまちづくり計画と連携を図りながら港湾の整備を行っていく予定である。